

幕僚列伝

鎌倉・室町・江戸幕府を支え続けた男たち

跡部
蛮



日本を陰で動かした
最強の官僚たち

大河で
注目!!

『逆賊』小栗忠順から鎌倉幕府の大江広元まで——。
時代を決定づけた「実務派」たちの視点から読み解く、

もう一つの日本史!

幕僚列伝

鎌倉・室町・江戸幕府を支え続けた男たち

跡部 蛮

星海社

399



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

NHK大河ドラマ『逆賊の幕臣』で「幕臣」への注目度が高まっている。

幕臣の直訳は「幕府の臣下」となるが、別の表現では「將軍直属の家臣」をいう。江戸時代、直参旗本などと呼ばれた官僚たちだ。その官僚を辞書でひもとくと「政治の動きに影響力をもつような高級官吏の一群」（『精選版 日本国語大辞典』）とでる。官僚＝事務畑のイメージがあるものの、このように彼らは幕政の政策立案にも関わっていた。

一方、幕末の歴史では薩長などの討幕勢力を中心に語られることが多いものの、幕府側からの視点も重要なファクターであり、小栗忠順や勝海舟ら本書で取り上げる幕臣たちの活躍も見逃せない。

江戸時代全般を通じても彼ら幕臣あつてこそ、幕府は初代將軍徳川家康から最後の將軍慶喜までの二六〇余年の長きにわたり、この国を治めてこられたといえる。八代將軍吉宗の享保の改革、さらに遡って町人文化が花開いた元禄時代の活況も、それぞれの時代の幕

臣たちの力量があつたからこそ生まれたものだ。

その幕臣は室町時代には幕府奉公衆と呼ばれ、鎌倉時代には御家人という名称で知られている。金閣寺に代表される北山文化を生んだ室町幕府三代將軍足利義満、初めて幕府を開いた源頼朝といった武家政権の指導者もまた、有能な幕臣たちの補佐なくして政権を安定させることはできなかった。

ただし、幕臣という用語には制約がある。江戸幕府の老中、室町幕府の管領かんれいを果たして、その用語でくくつていいのかという問題だ。江戸幕府の老中についてはもともと徳川家の譜代の家臣だった家柄だから、幕臣の中の最高幹部という解釈はできるものの、室町幕府の管領についてはその出自が將軍家である足利一族ながら、彼らは自立した存在であり、家臣というより、有力守護大名としての性格を強く持っていた。そこで本書では幕臣を少しだけ幅広く解釈し、「幕僚」という表現を用いることにした。軍隊でよく使われる用語だが、もともとの意味は「帷幕の属僚」である。幕府という用語は、そもそも大將が垂れ幕（帷幕）で陣所を囲い、幹部らがそこに集とつて作戦を練っていた陣営（府）に由来する。

その意味では、武家政権誕生以降、幕府指導者の補佐官らを「幕僚」とするのは妥当だと考えている。本書は、中世から近世に至る武家政治を裏で支えた「幕僚」らによる、も

う
一
つ
の
日
本
史
で
あ
る
。

二〇二六年九月吉日
跡部 蛭

はじめに 3

第一章

鎌倉幕府

武士の世を創り、そして食いつくした官僚たち 9

大江広元 幕僚「第一号」ここに誕生ス！ 9

三善康信・二階堂行政 スパイ&エリート／多彩な鎌倉幕府の幕僚たち 23

梶原景時 讒言魔と呼ばれる「鎌倉一の嫌われ者」は優秀な官僚だった 33

安達時顕・長崎円喜入道・長崎高資 鎌倉幕府を滅ぼしたとされる幕僚たちとその先祖 43

第二章

室町幕府

「乱世」という混沌をシステムで回した男たち 57

高師直 「好色破廉恥」の汚名を背負う室町幕府創業期の幕僚 58

第三章

細川頼之 彼がいなければ「室町幕府は瓦解していた」といえるスーパー幕僚 69
伊勢貞親・日野勝光 「応仁文明の乱」前後の「乱世の幕僚」たち 80
細川藤孝 一五代將軍誕生に奔走した幕臣たち 94

織田・豊臣政權 天下人に殉じ、奉公を貫いた「過渡期」の忠義 109

村井貞勝 本能寺の変で信長に殉じた織田政權の忠臣幕僚 110

石田三成 秀吉・秀頼の二代にわたり、「奉行」として忠誠を貫いた豊臣政權の幕僚 119

第四章

江戸幕府 太平の世をシステムで構築し、財政を回したプロフェッショナル 131

本多正信 謀臣から幕僚へ——鷹匠あがりの江戸幕府初代老中 132

伊奈忠次 三代で成し遂げた偉業／「東京」の基礎を築いた幕臣たち 140

阿部忠秋・田沼意次 人柄が世人に敬愛された年寄／革新的な政策で再評価される老中 149

萩原重秀 幕府財政を立て直し、近現代の通貨政策を先取りした幕臣 158

大岡忠相

「暴れん坊將軍」の改革実務を担った時代劇ヒーロー

166

第五章

幕末

国家滅亡の危機に立ち向かった、最後の「逆賊」たち

179

岩瀬忠震

ペリー来航後に唯一といえる「積極開国派」だった幕府官僚

180

勝海舟

小栗忠順のライバル登場——日本海軍近代化の基礎を築いた幕臣

193

山岡鉄舟・高橋泥舟

連係プレーで「江戸城無血開城」を成し遂げた幕臣兄弟

202

栗本鋤雲

幕府とフランスを繋いだ外国奉行

210

小栗忠順

徳川將軍を大統領にしようとした「逆賊の幕臣」

217

おわりに

228

第
一
章

鎌倉幕府

武士の世を創り、そして食いつくした官僚たち

大江広元

(一一四八～一二三五)

幕僚「第一号」ここに誕生ス！

そもそも幕府とは何なのか？

源頼朝が鎌倉に幕府を開き、やや誇張しているなら、空前の転職ブームが起きた。

それまで京の朝廷で鳴かず飛ばずだった下級官僚（貴族）らが「いざ、鎌倉！」とばかり、頼朝のもとに馳せ参じたのである。何しろ、のちに幕府と呼ばれる政権が鎌倉にできても、これまで武士たちは組織を作ってそれを運営した経験がなかった。もちろん、武士団を組織というならそうだが、彼らは「御恩」と「奉公」という主従関係のもとに集まっていたにすぎない。のちに御家人と呼ばれる彼らには官僚としての実務経験がない。

一方、幕府の主宰者（この人物を鎌倉殿と呼ぶ）である頼朝は平家を倒して朝廷から「平家没官領」もっかんを与えられ、その多くが「関東御領」と呼ばれて幕府の直轄領になっていくわけだが、たとえば、その関東御領を管理できる人材、実務官僚は何としても確保しなければ

ばならなかった。

つまり、鳴かず飛ばずだった京の下級官僚たちと頼朝との需要と供給のバランスが一致したわけだ。のちに「鎌倉殿の[＊]三人」と呼ばれる幕府幹部の中で、大江広元・三善康信・二階堂行政の三人はその転職組、すなわち、いずれも朝廷の下級官僚出身者である。そのうち、大江広元こそが事実上、日本史上初めて幕僚（帷幕の属僚）になった人物だといえる。では、なぜそういえるのか。「はじめに」で少し触れたが、「そもそも幕府とは何か」について深掘りしつつ、確認していこう。

幕府とは、宮中警護の近衛府の長官近衛大将らが陣所に幕を張り、帷幄（^{いあく}本営）の幹部らと戦略や戦術を練ったことに由来する。したがって、朝廷から右近衛大将に任じられた頼朝（のちに征夷大將軍）と彼を支える御家人らが集う政庁（役所）を幕府と呼ぶのは正しい。ただし、由来としてはそうだったとしても、頼朝が鎌倉に武家政権を草創した際、「幕府を開いた」という認識があったかどうかは別問題だ。当時の人々が鎌倉の武士政権を「幕府」と呼んだという史料は見当たらず、朝廷では幕府をただひとこと、「関東」「鎌倉」「東国」などと呼んでいる。

幕府という用語が定着するのは、はるか後年の江戸時代になってからと考えられるが、

鎌倉の御家人たちがやがて意識して自分たちの政権を幕府と呼ぶようになる。仮定すると、それはいつごろなのか。あくまで仮の話だが、蒙古襲来のころ（一二七四・一二八一年）ではなかったかと推論している。当時、鎌倉の幕府と京の朝廷のどちらが蒙古との外交交渉を担うべきかが問題になっており、朝廷と区別する上で御家人らが「幕府」という言葉を使うようになった可能性はあろう。

ともあれ、頼朝が鎌倉に開いた武家政権の政庁を後世「幕府」と呼んだのは事実だから、トップの補佐官と呼べる中心人物こそが史上初の幕僚といえるわけだ。

政所の官僚らに不満を抱く御家人

頼朝は建久元年（一一九〇）一〇月、精兵一〇〇〇余騎の東国武士らを率いて鎌倉を立ち、治承四年（一一八〇）以来の長い内乱を制した武家の棟梁として都へ凱旋。十一月二四日に右近衛大将に任官している。武官の最高ポストであり、当然のことながら、幕府を開くことができる。しかし、頼朝は右近衛大将に就いた直後の一二月四日、職を辞している。近衛兵の長官ともなると、京に常駐しなくてはならず、行動が朝廷に制約される。そこで頼朝は右近衛大将にいったん就き、その名誉だけを拝して実を捨て、朝廷と一線を画

す考えだった。実際に頼朝は辞職後、さっさと鎌倉へ帰っている。

そして翌年の正月一日、それまで頼朝の個人的な家政機関であった公文所を政所とあらため、その政所の吉書始（仕事はじめ）の儀式がおこなわれた。三位以上の公家（公卿）は政所という家政機関をもうけることができ、従二位右近衛大将となった頼朝にはむろん、政所開設の資格がある。こうして公文所を格上げしたことにより、旧公文所が頼朝の家政機関の枠をこえ、幕府の政務全般をおこなう機関としてスタートしたのである。この政所の初代別当（長官）こそが、公文所の別当だった大江広元である。

鎌倉幕府の公式歴史書といえる『吾妻鏡』はこの日の吉書始の模様を伝えたあと、御家人が恩賞にあずかった際に与えられていた頼朝個人の下文が召し上げられ、新たな下文が与えられた事実を伝えている。それが「政所下文」である。以降、幕府の主な行政文書となり、「前右大将さきのうだいしょうけ家政所下す」という一文ではじまっている。その政所に属する官僚には別当の広元のほか、令（別当の補佐役）として二階堂行政（詳細は別稿）が付き、政所下文は彼らの名で発給された。そのことに御家人らは不満を抱くのである。

頼朝が伊豆で挙兵した後、いったん石橋山の合戦（小田原市）で大敗を喫して房総へ逃れた際、その窮地を救った千葉常胤は、政所の官僚らを「頼朝の家司に過ぎない」と断じ、

「政所下文はつまるところ、家司らが署名した文書ではないか。それでは後日の証拠とは成し難い。それがしの分は別に（鎌倉殿の）花押が捺されたものを下していただき、子孫の代までの証拠としたい」と抗議したと『吾妻鏡』に記載される。

このあたり、こうした行政文書に慣れていない御家人たちの意識が窺われるとともに、広元をトップとする政所の役割が重要だった事実を物語っているといえよう。

事実、政所別当はやがて執権の別称だと考えられるようになる。建仁三年（一二〇三）九月七日、頼朝次男の実朝が征夷大將軍に補任^{ふにん}され、一〇月九日に將軍実朝の政所吉書始がおこなわれた際、『吾妻鏡』に「別当遠州（北条時政）」とあつて、時政（頼朝の正室政子の父）がこのとき、政所の別当についていることがわかる。時政は一二歳の幼い將軍実朝を傀儡にしようとし、同時にこのときをもって北条氏の執権政治の始まりとされる。

実朝の吉書始を伝える『吾妻鏡』はその記事の中で時政を「執権」と呼んでおり、彼の嫡男義時（その嫡流^{とくそ}を得宗と呼び、幕府の支配層となる）の代に政所と侍所（御家人を統制する役所）の別当を兼ね、鎌倉時代末期に作られた幕府の法律書『沙汰未練書』に「執権とは政務の御代官」とあるとおり、傀儡となった將軍に代わり、幕府政治を動かす役割を担うことになる。

初代政所別当の広元が執権と呼ばれないのは、彼が幕府の政治そのものを動かす立場ではなく、あくまで実務官僚として幕府を支える立場に徹したからだろう。ただし彼が政所の長官という重要なポストを通じて幕府の発展に尽くしたという意味で、まさに初代幕僚といえる立場の人物だったのである。

頼朝の知恵袋から幕府の長老へ

その大江広元は、平安時代以来の学問の家柄である大江家に生まれ、父は式部少輔大江維光とされる。論語などの経書（中国古代の聖賢の教えを述べた書物）を研究対象とする明法博士の中原広季の養子となっているから、厳密にいうと中原広元だ。六九歳のときに中原から大江へ姓を復したため、大江広元の名で語られる。京では天皇へ上奏する文書作りなどを担う外記という専門職にあった。彼が鎌倉へ下向した背景については次稿に譲るが、広元の能力の高さを漏れ聞いた頼朝が鎌倉へ呼び寄せたと考えられる。広元は元暦元年（一一八四）に入つてすぐ鎌倉入りしたとみられ、その年の一〇月、いきなり公文所（前出）の別当に任じられた。鎌倉方が都落ちした平家の本拠屋島（高松市）へ攻め入る準備をしているころにあたる。

翌年三月に壇ノ浦（下関市）で平家が滅び、以来、広元は実務官僚としてのみならず、頼朝の知恵袋として諮問に応え続けることになる。たとえば、平家の総帥平宗盛が捕虜として鎌倉へ送られてきた際に頼朝は会うべきかどうかを広元に下問し、その言葉に従い、拝謁を許さなかった。また、謀叛の噂を立てられた頼朝の異母弟範頼が起請文を差し出した相手が広元。同じく異母弟の義経が頼朝と不仲になった際にその兄への思いを滔々と綴った腰越状を差し出したのも広元だった（ただし、腰越状の真偽は疑われている）。

内乱の勝利者として頼朝が上洛した際には、ひと足早く鎌倉を発ち、都でその下準備に奔走している。その後、広元は京と鎌倉をなんとか往復し、朝廷と幕府の調整にあたるようになる。

こうして頼朝の知恵袋的な役割を担った広元だが、頼朝の死後は北条一族との同盟を意図した動きをみせはじめた。その契機は、有力御家人梶原景時（詳細は別稿）の失脚事件（一二〇〇年）だった。このとき北条一族と広元は、景時失脚を謀る御家人らとの距離を置き、総勢六六名もの御家人らが二代將軍頼家（頼朝の長男）へ出そうとした弾劾状に署名しなかった。また広元は、弾劾の急先鋒である和田義盛（鎌倉殿の一人）の一人らに弾劾状の扱いを託されたにもかかわらず、頼家へ一〇日あまりも取り次がず、義盛からなぜ上

申しないのかと詰め寄られている。このあたり、彼が実務官僚や知恵袋という枠を越え、幕府の政治そのものにも関係していたことを窺わせる。

その後、比企氏の乱^{*2}が起きた際には北条時政から味方するよう誘われたが、時政に「賢慮^{りょ}」を求めており、比企氏誅戮^{ちゅうりく}に賛成はしないが反対もしないという微妙な態度をつらぬ

いた。幕僚として政権の安定を優先したのだろう。しかし、比企氏が没落すると、幕府内のパワーバランスは一気に北条一族へ傾き、それ以降は北条氏と歩調を合わせ、同盟関係が鮮明となる。やがて時政が失脚すると、三善康信（前同）とともに北条義時邸で事後の策を練り、以降はその義時と一連托生の関係を続ける。その象徴が建保元年（一二二三）五月三日の和田合戦であった。

このとき、義時邸とともに広元邸が、反乱を企てた和田義盛勢の攻撃に晒されている。広元は三代將軍実朝や義時とともに避難したものの、保管している文書類を戦乱から守るため政所に拠ったと伝わる。

この合戦は幕府誕生以来、初めて鎌倉を戦禍に巻きこむ市街戦



鎌倉にある源頼朝の墓

となつたが、不思議なことに、この日、広元はのんきに賓客と酒宴をあげていたのだ。また、その日、義時は囲碁の会を催しており、盟友の三浦義村からの密告で和田方の動きを知る。義盛は、義時らが酒宴や囲碁の会で油断している隙をつくため、味方の御家人の到着を待たずに挙兵したと思われがちだが、義時が三浦から密告を受けた際、慌てた様子をみせておらず、事前に和田方の動きを予期していたとも考えられる。つまり、義時と広元は、囲碁の会と酒宴という演出によつて故意に油断をみせ、和田の与党が参戦する前に挙兵させ、撃破する算段であつたともいえる。

こうして長老時代の広元は北条一族と蜜月関係を築き、陸奥守に任じられた建保四年（一二二六）、六九歳の高齢に達していた彼は、大江へ復した。ところが翌年眼病にかかり、その二年後には邸が大火に焼かれる不幸がつづいた。それでも承久三年（一二二二）に後鳥羽上皇が挙兵すると（承久の乱）、義時の邸での軍評定に駆けつけ、広元は「守勢になれば敗北の因となる。それより運を天道にまかせ、早く軍兵を京へ発遣すべきだ」（『吾妻鏡』）と威勢のいい発言をし、そのとおり、幕



鎌倉の大江広元の墓。頼朝の墓からほど近い場所で眠る

府軍は京へ攻め上つて上皇軍をやぶる。

ただし、『吾妻鏡』は北条氏の同盟者である広元に甘く、文官で当時としてはかなりの高齢に達している広元がこのような発言をするはずがないという解釈で落ちついている。

ともあれ、乱の四年後、幕府の運営に半生を捧げた男は七八歳でこの世を去った。

末裔は室町幕府「最後の幕僚」

最後にこの初代幕僚の子孫について特筆しておきたいことがある。

広元は幕府開創の功によっていくつか所領をたまわり、当時の分割相続のルールに従い、相模国の毛利荘（厚木市）の地頭職を四男の大江季光すえみつが継ぎ、地名の毛利を称するようになった。幕府御家人毛利氏の誕生である。

その毛利季光は娘を執権北条時頼ときより（義時の曾孫）に嫁がせ、執権の縁戚となって前途洋々といえる将来が開けていた。ところが、季光が当時、北条氏に次ぐ勢力を誇っていた三浦一族から妻（三浦義村の娘）を娶ったことが禍する。義時の時代に北条と三浦は蜜月関係にあったものの、やがて関係は崩れ、ついに宝治元年（一二四七）六月に衝突。時頼らは三浦一族五〇〇余人を自刃させた。この宝治合戦で季光は娘婿の時頼につく考えだったが、

三浦一族の妻に説得され、三浦泰村に味方したのである。

当時は分割相続の時代で女性にも相続権があり、女性はいまでいう持参金代わりに親から相続した所領などをもって嫁ぎ、それらは夫の家に引き継がれていた。一方、武士の社会では双務契約が基本。妻がいわば自分の所領を差しだすわけだから、夫はその功に報いねばならず、それが妻の実家に何かあつた際に武力奉仕することだった。季光はこのルールに従い、行動したといえる。

結果、毛利荘は没収され、鎌倉の毛利氏はここに滅亡する。しかし、季光は広元から毛利荘のほか、越後国佐橋荘（さしはし）（柏崎市）を相続しており、承久の乱の恩賞で安芸国吉田荘（安芸高田市）の地頭にも任じられていた。季光四男の経光（つねみつ）が宝治合戦のとき、ちょうど佐橋荘に滞在していて難を逃れていたので所領は安堵され、その佐橋荘の地頭職をそれぞれ長男と四男に分割相続させた。その四男経光のまた四男時親（ときちか）が安芸へ移住し、安芸毛利氏の基礎を築くのである。

中国地方の戦国大名となる毛利元就はその末裔。安芸吉田の地を領し、安芸の国衆の一人という地位から毛利家を大勢力へ育てあげる。その元就の孫にあたる輝元の時代に、毛利家がある貴人が頼ることになった。元亀四年（一五七三）、織田信長によって京を追われ

た室町幕府の最後の將軍足利義昭だ。

義昭は河内から紀州へ転じ、天正四年（一五七六）、備後鞆^{とも}ノ津（福山市）へ入った。以降、その義昭の政権は「鞆幕府」と呼ばれる。

鞆幕府は輝元を副將軍に、信長に従わなかった奉行・奉公衆らを擁していた。また、京都五山（幕府管轄下にある禅宗寺院）の住持を任命するという幕府機構としての体裁も保っていた。さらに、毛利家内部では義昭を「將軍」と呼び、幕府の目的が「織田上総介^{かずさのすけ}信長御退治」にあったことが、毛利家家臣の書状から判明している。つまり、輝元は鞆幕府において將軍義昭を支える重要な幕僚の役目を果たしていたのである。

その後の歴史はご承知のとおり、本能寺の変（一五八二年）で信長が殺され、輝元が豊臣秀吉に臣従したため、義昭は天正一六年（一五八八）一月一二日に將軍職を辞し、ここに初代尊氏からつづく足利家の幕府は滅びるのである。

頼朝が草創した幕府の幕僚「第一号」だった大江広元の子孫が室町幕府「最後の幕僚」の役割を担ったことになろう。

* 1 鎌倉殿の二三人『吾妻鏡』の建久一〇年（一一九九）四月一二日付の記事で、二代將軍源頼家に代わり、訴訟を吟味する

談合衆のことが記されており、北条時政・義時父子をはじめ、一三人の名がある。NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』（二〇二二年放送）で一躍この一三名が知られるようになった。

- *2 比企氏の乱Ⅱ建仁三年（一二〇三）九月、二代将軍源頼家に重用された比企能員よしかずとその一族が北条時政らによって滅ぼされた事件。頼家は出家させられ、やがて伊豆国修禅寺に幽閉殺害された。

主要参考文献

- 上杉和彦「源頼朝と鎌倉幕府」（吉川弘文館、二〇二二年）
本郷和人「鎌倉幕府の真実」（産経新聞出版、二〇二三年）
藤田達生「証言 本能寺の変 史料で読む戦国史」（八木書店、二〇一〇年）

三善康信（一一四〇～一二二二）

二階堂行政（生没年不明）

スパイ&エリート／多彩な鎌倉幕府の幕僚たち

源頼朝に転職幹旋した男たち

鎌倉幕府草創にあたり、源頼朝が京の朝廷に仕える下級官僚をリクルートした事実は大江広元の稿で述べた。頼朝が彼らを鎌倉に呼ぶに際し、いくつか伝手を頼ったはずだ。

その伝手の一人が藤原邦通くにみちという下級官僚だと考えられる。治承四年（一一八〇）八月

四日付の『吾妻鏡』に「洛陽放遊の客」と記される人物だ。洛陽すなわち京の都をはなれ、関東に下って遊んでいたということだろう。有職ゆうそく（行事や儀式などに詳しいこと）や諸芸に

通じていたとされ、当時まだ挙兵直前だった頼朝に、安達盛長の紹介で仕え、祐筆となる。なお、安達盛長は、何人かいる頼朝の乳母の一人の娘婿で、その配流所（伊豆韮山）で寝

起きを共にした側近中の側近。彼は後に有力御家人となって、その子孫は北条一族と縁戚関係を結んで栄える（詳細は四五ページ参照）。盛長も「鎌倉殿の一人」の一人である。

おそらく、藤原邦通が都から下って伊豆あたりにいたところ、安達盛長がどこかで彼を見かけ、頼朝に紹介したのだろう。挙兵をひかえる頼朝からすると、成功したら味方の武士らに恩賞を与えねばならず、その際に下文を代筆する祐筆が必要となる。ちょうど頼朝もそういう人材を探していたのかもしれない。

事実、頼朝が八月一七日に挙兵し、その二日後、伊豆国の在庁官人だった舅北条時政のライバルで平家方だった官人の知行を否定、すなわち所領を召し上げる内容の下文を発給している。『吾妻鏡』はこれをもって「関東における政治の始まり」としており、この案件を奉行したのが邦通である。その意味では、この邦通こそが幕僚「第一号」といえそうだが、まだ頼朝が幕府を草創する前の話だ。

とはいえ、邦通も下級官僚ながら貴族の端くれだから都に伝手があり、彼が知人らを頼朝に転職斡旋したことは十分に考えられる。

もう一人、より確実に頼朝へ下級官僚の転職斡旋をおこなったといえるのが中原親能ちかよしである。彼ものちに紹介する三善や二階堂とともに「鎌倉殿の一人」に名を連ねている。

明法博士の中原広季の子として生まれ、義兄に大江広元がいる。親能が広元を頼朝に紹介したのはまず間違いないだろう。彼はかなり早い時点で頼朝と知り合っており、京の人材を求める頼朝のニーズに応じて斡旋した可能性は高いと考えている。

頼朝のスパイだった男

頼朝にはこの二人の他にも京とのパイプがあった。三善康信である。朝廷の記録などを司る少史などの職にあり、彼の母親もまた、頼朝の乳母の妹だった。その関係で頼朝が伊豆へ流されたのちも京の情報を伝えていた。

とくに治承四年（一一八〇）六月一九日、『吾妻鏡』によると、その康信の使者（弟の康清）が驚くべき知らせを頼朝のもとへもたらした。以仁王[★]の平家打倒の令旨を受けた者に、平清盛が追捕の兵を差し向けるという情報だった。もちろん頼朝もその令旨を受け取っている。だから康信の使者は頼朝に「早く奥州へお逃げなさい」と伝えたのである。

ただし、平清盛がこのとき伊豆の頼朝に追捕の兵を差し向けるつもりだったかどうかは、はなはだ疑問。むしろ清盛は同じ源氏でも摂津源氏の源頼政一派の肅清を目論んでいたとみている（頼朝は河内源氏）。相模国^{おおぼ}の大庭景親に源有綱^{おおつな}追討の任を与えているからだ。有

綱の父仲綱は令旨を受け、その年の五月に父頼政と共に打倒平家の軍を挙げたものの、宇治で敗死している。頼政は伊豆国を知行しており、孫の有綱はその関係で当時東国にいて難を逃れていたのである。

こうして清盛が頼政一派の粛清を重くみ、反対にその眼中に頼朝の姿がまるでなかったとしても、康信からの情報が頼朝の危機感を煽ったのは間違いないさそうだ。つまり、「逃げるくらいなら……」という思いが頼朝に挙兵の道を歩ませたという解釈だ。挙兵が失敗したのならともかく、成功したのだから、康信からの情報が、その後の歴史を大きく動かすことになったのである。

康信は有綱追討の話のほかにも、幾度となく情報を頼朝へ伝え、その中にはいわゆる機密事項も含まれていた。つまり、彼は頼朝のスパイとしての役割を果たしてきたのである。ほかの京からの転職組と違い、康信が鎌倉に下った日付は明らかになっている。『吾妻鏡』の寿永三年（一一八四）四月一四日条に「入道善信（俗名康信）ら京都より参着」とある。『吾妻鏡』編纂の時点ではつきりした記録が残っていたからだろう。これまで京の機密事項を伝えてもらっていたこともあり、それだけ頼朝が康信の鎌倉入りを強く望んでいたからかもしれない。政所の吉書始（仕事はじめ）を伝える『吾妻鏡』の建久二年（一一九二）

小栗忠順

ただまさ

(一八二七～一八六八)

徳川将軍を大統領にしようとした「逆賊の幕臣」

四回も勘定奉行になった名門旗本

明治のジャーナリスト福地源一郎が「幕末の三傑^{*}」の一人に挙げる小栗忠順の政治思想は『続再夢紀事』（福井藩の記録）に掲載される次の一文に尽きる。

「諸侯を亡ぼし天下郡県の世となし、大樹公をもって天下大統領となし、才智あるものを執るべき」

幕藩体制および封建制を否定し、全国に郡県制度を敷いた中央集権国家の創設と、そこまではのちに明治維新政府の誕生となつてほぼ実現するに至るが、その国家のトップに大樹公、すなわち將軍家を置き、徳川家による専制政治を志向している点において、同じ幕臣でも勝海舟らと根本的に異なっている。

ただし、『続再夢紀事』には前福井藩主で幕府政治総裁職をつとめた松平春嶽の考え方が

強く反映され、彼が忠順を警戒していた点をつけ加えておきたい。しかし、忠順が封建制を廃して徳川家中心の郡県制を敷こうとしていたのは間違いない。

そのことは多分に忠順の出自に関係するとみてよさそうだ。

戦国時代の初め、徳川家のルーツである三河松平家は一八家（確認されているのは一四家）あったとされ、当時、岩津城（愛知県岡崎市）の松平家が一族の惣領格だった（やがて没落して家康の安城松平家が台頭）。その「岩津松平家」の信吉（小栗家初代）が筒針城（岡崎市）の城主小栗正重の妹を娶り、事情ははっきりしないが、その子忠吉（二代）が筒針城で小栗氏に養育されたようだ。つまり、忠順の先祖は家康の父祖の本家筋にあたる松平家出身ということになる。その後、小栗家から忠政（四代）という武将が出て、彼が家康に小姓として仕え、元亀元年（一五七〇）六月、徳川軍が織田軍とともに北近江の姉川河畔（滋賀県長浜市）で浅井・朝倉連合軍と戦った際、傍らにあった槍で家康の危機を救い、以後、彼がなんども一番槍を入れたので「又、一番の手柄だな」という意味で「又一」と称したとされる。その名は引き継がれ、忠順は小栗又一家一二代目にあたる。

彼が生まれ育った江戸駿河台には名門旗本の邸が多く、そういう環境のもとで成長したこともその政治思想に影響したのだろう。

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」、としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文



SEIKAISHA
SHINSHO